

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻145号 平成27年12月1日発行

「修身教授録」探求（第九回） 質問

森 信 三

さあ今日一つ質問ということにいたしました。う。誰からでも良いですから尋ねてください。時間が無いですから遠慮しないように……。するとまず森田君が立ち上がる。

森田「朝礼で本校のように宮城遙拝を先にして、先生方に対する挨拶を後にするのと、先生方との挨拶を先にしてしかる後宮城遙拝および伊勢神宮遙拝をするのと、先生のお考えはいかがですか。」

先生「朝礼の際の遙拝については、今君の言われたように二通りあって、どちらがどうとも申されません。宮城の遙拝を後にするのは、おそらく朝礼場に集まっただけでは皆の者の気分がまだ十分に整っていないからでしょう。しかし私は本校のようにやった方がよくはないかと思えます。」

田中「親鸞聖人は法然上人の弟子であるのに新たに一宗を開かれたのはなぜでしょう。それに対する先生のお考えはいかがですか。」

先生「なかなか良い質問ですね。さてそれについて弟子でも師匠ほどに立派になつてきますと、その教えの説き方が変わってくるものです。すなわち師匠の精神を受け嗣ぐほどの力量を持った人になりますと、師匠の教えをただ型通りの紋切り型で伝えるだけでは済まなくなるもの

です。それは師匠の精神を深く追求していくことによって、その外形を破って奥深くその精神に立ち入ってその命をつかみますから、自ずとその説き方も変わってくるのです。その意味からは単に師匠の型通りに説いている人は、まだモウ一つ偉くないとも言えましょう。とにかく古今の実例を見てみましても、師匠と同格のところまでくると必ずその説き方の形式が変わってくるというのが普通のようです。」

田中「宗教と国家との関係はどう考えたらよいでしょうか。」

先生「宗教を通して国家に安心立命すべきです。宗教を貫いて国体にぶち当たっていつてこそ本當の日本人の信仰です。仏教をただ仏教として信じているだけでは、真の日本国民としては不十分です。日本人の真の信仰は、仏教を通り抜けて国体につつかるところまで行かねばならぬのです。その点大楠公は宗教から申しでも真に宗教に徹した方と言えましょう。「七生報国」となって初めて真に日本人としての大信仰です。」

田中「仏教は超国家的であるといふのはどういふことですか。」

先生「これは一面仏教の長所でもありませんが同時に短所でもあります。なるほど普遍性という点からは長所といつて言えないこともないでしょうが、しかし我が国の宗教としては単にそれだけでは足り

ないのです。宗教もわが国では国体に合したものでなくはいけないのです。宗教は超国家的だと言ってそれを良いことのように考えている人が今日もなお少なくないようですが、真の超越は内部がまず充実して、そこから満ち溢れ出たものでなくはいけない。すなわち内在にして同時に超越でなければ真の超越ではありません。でないと言いつつながら実は単なる遊離に過ぎないことになってしまします。そういう点から見て、仏教はわが国の国体を照らす一つの側面鏡であるというのがまずわれわれ日本人としての真の仏教観でしょう。」

田中「仏教には他力と自力とあるようですが、私の家は真宗のためか、宗教は他力でないといけないと思うのですが、先生はどうお考えになりますか」

先生「他力とか自力とか言いますが、それは要するにその人の性格の肌合いによって、あるいは禅にあるいは真宗に向く人と別れるのです。そこで今脇から優劣を言うべきものではなく、各自自分の「肌合い」に近いところから入っていくと良いと思います。つまり自分だけが落ち着くべきところへ落ち着けば良いのです。少なくともまずそれが根本です。美人薄命とも言われるように、全て良いものはまた腐敗しやすいのでして、宗教にはなかなか良いところもありますが、同時にまた気をつけねばならぬところもないわ

けではありません。

田中「真宗ではどういう人の本を読んだらよいでしょうか」

先生「さあ私などは曾我量深さんとか金子大栄さんなどのものに心を惹かれますが、しかし諸君にはそれらの方のは少し難しすぎるでしょう。諸君には蜂谷賢喜代さんなどのが良いかと思えます。幸いこの方は大阪の方でもありますから、直接ご指導をいただく便宜もあつて良いかと思えます。

■吉田松陰全集購入予約のすすめ

12冊 一ヶ月一冊 一円50銭宛て一カ年

では今日は質問はその程度にしておいて、松陰全集のご紹介を申しませう。まず結論から申せば、私は諸君が卒業記念として是非この「松陰全集」を購うことを心からお勧めしたいのです。そもそも人間というものは、最終の学校を卒業するとき自分が一生読んでも尽きないような本を購うておくがよいと思えます。というのは、いつも申すように卒業というものは業を終わつたのではなくて、実に新たな人生の踏み出しだからであります。その意味で私は卒業記念として諸君が是非ともこの「松陰全集」を購われることをお奨めしたいのです。

私も今からちょうど20年ほど前、愛知師範を出るとき卒業記念として「日本倫理彙編」というものを購いました。それ

はその頃愛知師範には八木幸太郎先生という偉い方がおいでになりましたので、私は卒業の前その先生のところへ伺つて、卒業記念に何か書物を買いたいと思いつすが何を求めたがよろしいでしょうか、とお尋ねしましたところ、先生はしばらくじつと考えておられました。やがて「それは日本倫理彙編」を買うがよろう。これは現在の君には役に立たないだろうが、しかし今後10年か15年したらキツト役立つに違いない。そうざらにはない本だけど、しかし探せば名古屋にも二組ぐらいはあるだろう」とのことでした。当時4年制度の師範卒業生に向かつて、10年後を見通して「日本倫理彙編」をお勧めくださった一事をもつてしても、心ある人には先生がいかに卓越した方であるかがお分かりになるうかと思えます。晩年八高の漢文の講師をせられ今でもご存命であります。とにかく師範の先生としてはずもことにもつたないお偉いお方でした。尤も諸君には私がこう言つてみたとしてよく分からねぬでしょう。というのは諸君にはこの「日本倫理彙編」という書物がいかなる書物であるかが分からないです。から無理ありません。

■「日本倫理彙編」について

この「日本倫理彙編」という書物は全部で10冊から成り立っている大叢書で、内容はわが国の徳川時代の有名な学者の

代表的な著作を全部集めたものであります。私は師範を卒業してちょうど13年目の年頭にこの「日本倫理彙編」の中に入っている藤樹先生の「翁問答」を読んだのが、この「日本倫理彙編」を読み出したそもその手始めでありまして、ちょうど八木先生の予言が的中したわけでありませぬ。当時はまだ岩波文庫に「翁問答」の入っていない時代でありまして、これによる他ちよつと手に入らなかったものです。

さて余談は別として、諸君のうちには卒業記念としては「松陰全集」12冊は手トえら過ぎると思われる人も少なくないでしょう。しかし私が「日本倫理彙編」を買ったときには値は10円でしたが、しかし当時の師範出の初任給は16円ですから、今日の値段に直せばまず³⁵、6円から40円近い値段です。これを思えば今1冊1円50銭宛ての分払いで12冊の「松陰全集」を買う事は必ずしも高いとは言えないでしょう。何んといつても月払いですから楽です。こうして今から諸君がこの予約に入っておくと、ちょうど諸君らが卒業する頃には完成して、諸君は12冊の「松陰全集」を手にして各々その任地に赴任することができるようになります。天師の昭和13年度の卒業生は皆「松陰全集」を携えて卒業したということになったら実に素晴らしいことです。月に1円50銭のことですから、一切の費用を節約すれば

大部分の人が何んとかならぬ事はないでしょう。

私は大学の3年間一切の費用を節して書物を買ったものです。ちょうど第一次欧州大戦の後でマルクが下がってドイツの書物が安かったものですから、国から金を送ってもらおうと食券と部屋代と風呂札とを買おうと、残りのお金全部で本を買ったものでした。そこで時には電車賃さえなくなつたこともありましたが、そのお陰で今日大学の所在地を離れてこうしたところに居ても、一応自分が読まねばならぬ基本的な古典は事欠くことがありません。しかしそれはまあとにかくとして、諸君は何とかしてこの「松陰全集」だけは買うと良いですがね。わずか八週間しかいない臨教の人でも、私が奨めたら買う人が出てきましたから、うっかりすると諸君臨教の人に負けますよ。

■卒業後の読書について

卒業後本を読む人と読まない人とは、10年もするとその差がウンとついて来てどうしたって追いつけないようになりませぬ。ですから諸君も30を過ぎる頃まではどこか上級学校へ入ってつもりで、全くの書生生活をするのが良いでしょう。つまり角帽をかぶらない「無形の大学の学生」になるんです。そうしてウンと立派な書物を読んで、大学の卒業生と何ら変わりないだけの実力をつけるのです。同

じ程度の力ですと、大学出と独学の人のでは独学のの方が味わいがあります。そこで諸君も30まで大学に入ったつもりでウンと勉強するんですね。それにはまず志を立てて30年までは酒煙草を飲まぬことにして書物を読むのです。諸君、御奉公ご奉公ご奉公と言ったって、実力なくして国家にご奉公のできるものはありません。このことはお互いに深く考えてみなければならぬことだと思ひます。

（真壁定記）

（修身教授録第三巻昭和18年9月 同志同行社刊）

日本民族の新生（微言）

森信三

○日本の新生を思想的図式として考えれば結局「大日本は神国なり」という素朴的な自己肯定か、キリスト教とマルクス主義という二本の短刀によって、切腹的に二重の自己否定をすることにより「世界史は神曲なり」と言う絶大なる真理を生誕せしめることであろう。

○「大日本は神国なり」という思想の誤謬はその神觀歴史觀がともに民族の主觀的な自己肯定たりしところにある。

○而してそこに胚胎せしめられていた神觀と歴史觀との一貫性は、今やキリスト教とマルクス主義とによる徹底的洗礼によつて「世界史は神曲なり」という偉大なる人類の真理を開頭せしめんとしつつある。

○今日日本の新生にあたり、その思想的媒介としてキリスト教とマルクス主義という人類の持つ両極的な横の思想の必要なる事は、我々の伝統的な思想が極端なまでに生命の縦の系列を過重視して来たためである。

○終戦後いろいろ問題になった日本人の残虐性の問題も、その根本は生命の縦の系列の過重視にその最深の因の存するこゝとを突き止めるまで民族的反省を徹せしめるでなければ、民族の徹底的新生は不可能と思われる。

○民族的反省の要は認めても、民族の残虐性の問題に対してはこれを黙殺または看過し、いわんやその根因が民族の伝統的世界観としての生命の縦の系列の過重視にあるという点まで、反省のメスを突き刺していくでなければ、敗戦の真意義に徹したものは思われない。

○スラブ族がツルゲーネフからトルストイを経てドストエフスキーに至るまでの一連の文学によっても窺えるような、世界にも稀な敬虔な宗教的 민족でありながら、突如無神論としての唯物史観による革命を招来せしめたことについては、今日なお多くの日本人は不審に思っているようである。

○しかしその原因は一步突っ込んで考えてみれば、極めて明白である。すなわちスラブ族には個の自覚としてのルネッサンスおよび宗教改革がなかったというこ

とである。スラブ族の奉じたキリスト教はギリシヤ正教であって、最も原始的なものであり、その点がかえって人をしてそれを無比の敬虔性と思わせるのである。○しかしギリシヤ正教の敬虔性は宗教改革を通過しない素朴なる単純性に成立するものであって、そのために却って、一転して正逆なる唯物論にもなりうる可能を蔵したことを知らねばならぬ。

○個の自覚が欠けていたという点では、我らの民族もまた別個の意味から該当していると言わざるを得ない。そしてその点に民族の残虐性の問題の根因はあるのである。

○多くの日本人は、我々日本人ほど素朴純情な民族はないと信じて来、今日なおその惰性的延長線上に居る人も少なくないようである。しかしそのいわゆる素朴純情そのものが、翻転すれば無意識的残虐性となることを反省しなければならぬ。民族としてこの点に対する徹底的反省を欠くとき、暴力支配の思想に引きずり込まれる危険性あることを知らねばならぬ。

○日本の新生に対してキリスト教とマルクス主義とが不可欠の二大媒介思想というべきだということは、歴史的にも、論理的にも明瞭であるが、さらにこのことは今や現実の上にも実証せられんとしつつある。

○最近京都府下に起こった全村を挙げてのカトリックへの転宗は、その一原因と

して、青年たちの共産党への傾斜という問題が挙げられている点で、実に重大な示唆を含む事件といつて良い。すなわちそこには如上民族の本能感覚の一端が窺えるのである。我らの民族は今こそ活眼を開いて現実の上に真理を活読しなければならぬ秋である。

（「開頭」第27号昭和24年6月号）

あとがきに替えて

日本民族の新生については戦後70余年を経ての今日、果たして森信三先生が申された程度に日本民族の新生が成ったか否かは読者の判断に依ることかと……。日本民族の残虐性が生命の縦の系列を過重視してきた……との指摘は、ひとり日本民族のみではないと思う。むしろ我が民族は生命の縦の系列の過重視については、西欧の、とりわけドイツ民族の方が顕著であり、これはナポレオン以前も同様ではなかったかと類推したい。日本で武士が台頭して戦乱の一時代があったが、果たしてどの程度に残虐なことがあったろう。江戸期に入ると、その点は諸外国よりも緩かった観なしとしない。ただ日本民族特有の「自刃」「切腹」についての考究は必要だろう。

（28日二繁）

〒633-0003
 桜井市朝倉台東2-538-89
 電話0744-4513422
 Email:hj3@ken.jp
 http://web1.ken.jp/syushn